2023 年度入試の総括　　静岡県立伊東高等学校　令和５年３月 31 日発行

進路状況

令和４年度の本校卒業生の進路結果は、様々な分野でそれぞれの生徒が努力を重ね、十分に力を発揮したことによってもたらされました。卒業生 115 名のうち、四年制大学への進学者が 89 名、短期大学への進学者が５名、専門学校等への進学者は 14 名、就職者は７名。進学希望者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する大学入学共通テスト（旧大学入試センター試験）の受験者は、99 名(86%)でした。新型コロナウイルス感染症の影響は続いていますが、３年目を迎えた共通テストも安定することなく、大変苦労した年でした。そんな中でも本校の生徒は、進路学習やキャリア啓発プロジェクト（教員・看護・保育等）で志望意識を強め、第一志望を確立させ希望する学びをぶらすことなく進路実現に向けて進んでいきました。大学進学の意識はさらに高くなってきており、大学進学率は昨年(74%)以上の 78%となっています。また、専門学校、就職を希望する生徒は安易な選択でなく、強い希望を持って低学年次から希望している生徒が多く、自分を本当に成長させてくれる進学先はどこかと複数の進路先を比較検討し、明確な目標を持って選択していました。就職に関しては、自らが考える地域の課題を解決しようという思いを持って就職にチャレンジし、見事に内定を勝ち取っています。

今年度の学年全体の特徴として、第一志望を貫いた生徒の多さです。59/115（51%）の生徒が６月の第一志望届であげた進路希望先に合格をしました。中には、総合型、学校推薦型、一般とすべての受験方式でチャレンジし、合格を勝ち取った生徒もいました。生徒に最後まで寄り添って伴走をした学年団の力も大きかったと思います。目標に向かって最後までやりきることは生徒の成長に繋がったのではないでしょうか。さらに上位層に対して１年次から行った旧帝ゼミの結果が現れた学年でもありました。

四年制大学

国公立大学

国公立大学には筑波大学、横浜国立大学、広島大学をはじめ、県内大学には静岡大学３名、静岡県立大学４名の計 29 名が合格を果たしました（一般 18 名・推薦 11 名）。また、それぞれの生徒が学びの内容や特色にこだわりを持って受験校を選択するという本校の指導が生かされており、全員が納得した選択のもと最後までやり抜いた結果でした。さらに、今春の卒業生も国公立大学にこだわり、全国的に中期・後期試験の欠席者が多い中、最後まで粘り合格した生徒も５名いました。大きな特徴としては１年次から行った旧帝ゼミの結果がみられたということです。残念ながら不合格だったものの、京都大学にチャレンジした生徒もおり、ブロック大とよばれる大学に合格した生徒が出たのはここ数年ではみられませんでした。伊東高校はしっかりと生徒を育てることができることが証明されたと思います。

本校で国公立大への進学希望が多い背景には、

① 少人数教育で伊高生に向いている。
② 学費が安い。
③ 研究施設・設備が充実している。
④ 生活費が安い（特に地方）。

といったことがあげられます。一方で、多額の税金投入を行っている国公立大にはそれなりの学力が求められ、定員約 13 万人の中に入るにはプラスαの努力が必要であり、「選ばれた者」になる必要があります。資源のない加工貿易国で日本では、さまざまなレベルでの技術者を必要としており、その点で特に理系では大学院までの６年間一貫教育が求められています。そこで、圧倒的に学費の安い、教育・施設共に充実している国公立大を中心に進学先を考えることも必要であると考えられます。

私立大学

私立大学では、延べ合格者が 218 名であった（推薦９名・総合型９名・一般 200 名）。

成城大、成蹊大、東洋大、駒沢大、専修大、京都産業大と第一志望の有名私立大学の合格をつかみ取

る生徒がいました。

これまでは“日東駒専”レベルの私立大学に合格した生徒の多くは、いわゆる“５－７型”の学習をしてきた生徒で、これらの生徒は国公立大学と私立大学の両方に合格し、自分にとってより良い学びの環境を選択することができるということが、本校の特色の一つになっていました。しかしここ近年は、“日東駒専”以上を第一志望とする生徒が、努力を重ね合格を勝ち取ってくる生徒が多くいます。一度の不合格などで諦めることなく、何度もチャレンジし第一志望を勝ち取る生徒が増えてきました。今年度は補欠合格繰り上がりで第一志望を勝ち取った生徒もいました。これらはすべて、第一志望を譲らないという強い想いをもてる志望先ができている本校の指導の結果であると考えます。また、その最たる例として昨年度 10 年以上振りに一般入試での早稲田大学合格を勝ち取った先輩の影響も大きかったと感じています。多くの生徒に共通していたことが、学校の自習室を利用し、教員とともに最後まで諦めずに戦ったということです。

短期大学

短期大学へは５名の生徒が進学しました。専門学校と同様、職業に就くための職業訓練の場的性格が強いです。生徒たちは自分の希望をしっかりと持ち比較検討をし選択していったのが印象的です。就学期間が短い分入学時の“力”がそのまま「就活」の成否につながります。そのため本校では、総合型選抜などで自分をプレゼンすることで合格を勝ち取り、並行して共通テスト学力を養成することで、社会人として必要な基礎となる力を前もって身につけて入学することができるようにと考えています。また、公立短大や有名私立短大では、短大卒業後の四年制大への編入学が増えています。例えば、本校から大月市立大月短期大学に進学した卒業生が、短大卒業時に都留文科大学、信州大学、下関市立大学に編入学を決めている例もあります。

専門学校

14 名が進学を決めています。医療系が半数と多いですが、服飾、芸術、園芸など将来の職業から強い希望をもった生徒がこの選択をしています。専門学校は途中での方向転換ができない場合がほとんどです。専門卒の就職は学校推薦によるものが多いという状況をふまえ、「専門学校選び」＝「就活への第一歩」という観点で複数の訪問や比較を行い、教育内容や就職支援について納得して進学することが重要です。

看護・医療系専門学校については、四大との併願関係が強く、近年四大が増加しているものの本校生徒が希望する大学の難易度は変わらず、四大希望の生徒で専門学校に進学することとなった事例は本年度もありました。さらに専門学校も易化は見られず、学力と志望意識が伴わないと不合格となる事例が見られました。国家試験を前提とする専門学校への進学は、やはり“学習歴”が求められています。

看護学を学ぶ四大と、看護師を養成する専門学校とでは、将来のキャリアで大きな違いが出てきます。そこで夏の一日ナース体験や看護プロジェクト等を通してその違いについて習熟し、どのような看護師を目指すのかをあらかじめ固めておく必要があります。

就職

今春の卒業生の就職者は７名で、５名が公務員就職でした。インターンシップや外部の講師（陸上自衛隊人事担当）を招いて面接指導を行う等、早い時期から対策を取り、採用を勝ち取りました。また、日々の授業で教養科目の対策を行い、コミュニケーション力を向上させるために様々な活動に積極的に取り組むなど毎日意識を持って過ごすことが重要であると考えます。

希望進路実現には「凡事徹底」そして「文・武・芸、三道鼎立」

・整理整頓、あいさつ、時間を守る！

・すべては授業！そのために、家庭学習の習慣を身につける（予習・授業・復習の黄金サイクルの確立）。**学習量は学年＋１時間の家庭学習**。教科が偏ることなく、毎日学んでいくことが必要である。

・**単に勉強だけでなく部活動、行事にしっかり取り組む**。その中で、自分の見方や考え方を広げ、最後までやり抜く力を育てていくことが必要である。